

# 詩篇日本語訳への提言

— 及び試訳「讃美之歌」〈韻文訳詩篇〉 —

Suggestions for a Japanese Rendering of the Psalms

B. H. チェンバーレン著

Basil Hall Chamberlain

手代木 俊一訳

Translated by Shun'ichi Teshirogi

## はじめに

日本における讃美歌を扱った初期の論文の中で、タイトル中に〈讃美歌〉ないし〈Hymn〉という言葉が現れる最初の論文は、Carles著の“Music for Japanese Hymns”(The Chrysanthemum. vol.2. 1882)であるが、讃美歌の内容に触れた最初の論文は、B. H. チェンバーレンの「日本の歌における枕詞と掛言葉の用法について」(1877)、「詩篇日本語訳への提言」(1880)であろう。このことに関して海老沢有道氏は『日本の讃美歌』「第四章 日本讃美歌学の発達」の中で次のように述べている。

「日本に於いて讃美歌が学的に考究され、所謂讃美歌学 Hymnology として、少なくともキリスト教会内に於いて認められ来たのは、極めて近い時代のことで、未だそれは揺籃時代にあると云はねばならない。こゝにその発達のあとを書誌的に述べて行き度いと思ふ。

まづ、日本讃美歌が学的に取扱はれたのは、1877年及び80年(明治十、十三年)のチェンバーレン教授の二論文に指を屈すべきであらう。即ちそれは、

B.H.Chamberlain, On the use of “Pillow-words” and plays upon words in Japanese poetry. (Transaction of Asiatic Society in Japan, vol. V. Pt.1. Jan. 1877)

一, Suggestions for a Japanese Rendering of the Psalms. (T.A.S.J., vol. VIII. Pt.3. Apr. 1880)

で、前者は和歌、歌謡に於ける枕詞、掛言葉の使用について述べ、日本に於ける聖書、讃美歌などのキリスト教文学も、その古来の伝統の研究の上に立てられるべきであることを論じ、一般の宣教師や、漢学的素養しか有せぬ日本人信徒の缺陷を指摘して居り、後者にその具体的例として、詩篇の如き詩文学の翻訳は特に万葉調によるべきであると、みづから詩篇の試訳を掲げてゐる。不幸にして此の論文は当時の日本キリスト教界に於いては、未だその水準に到達してゐなかつたため、彼の復古的見解も理解される所少なく、聖書、讃美歌の翻訳に於いても、讃美歌の創作に於いても殆ど無視されてしまった。」

帝国大学で日本語学、比較博言学を担当、『英訳古事記』、『日本事物誌』で知られるイギリス人、バジル・ホール・チェンバーレン（1850-1939）は明治6年（1873）来日し、明治9年（1876）にロンドンの文芸雑誌 *The Cornhill Magazine* に『実語教』、『童子教』の英訳を掲載した。そして、最初の論文である “On the use of pillow-words and plays upon words in Japanese Poetry” 「日本の歌における枕詞と掛言葉の用法について」を日本アジア協会の席上で発表する。チェンバーレンはこの論文の最後の部分で次のように述べている。

「日本の古代の歌とその歌の形式を決定づける詩形論に関して、丁寧に研究しなければならない。それは、あらゆる詩の作品の中でもっとも輝ける存在である—ヘブライ語詩篇—の日本語訳を成功させるためである。わたしはこの件に対して評価を下しうるに最もふさわしい資格を持った、何人かの日本人により確信するにいたった。すなわち、詩篇の翻訳には万葉集の長歌風に韻文化することだけが、日本人の音に関する感覚には、唯一残された満足のいく方法であろうということである。」

16世紀イギリスにおける詩篇の韻文訳、すなわち詩篇歌からはじまる英語讃美歌の歴史を考えると、チェンバーレンのこの発言は興味深い。ちなみに当時、アメリカから来日した宣教師を中心に讃美歌はかなりの数が訳され、讃美歌集も刊行されたが、翻訳委員会訳の詩篇はまだ発表されていなかった。

そして、このチェンバーレンの発言が具体化するのが、やはり日本アジア協会で発表された “Suggestions for a Japanese Rendering of the Psalms” 「詩篇日本語訳への提言」である。かれはここで詩篇を12篇、万葉集長歌風に翻訳するが、海老沢氏<sup>2</sup>が指摘しているように、当時のキリスト教界の状況や、訳文の凝りすぎのため、かれの意図はまったく理解されなかった。そして、チェンバーレン自身も発案を敷衍することもなく、試訳を改訳することもなかった。

しかし、チェンバーレンのこの論文は、当時来日した外国人が日本語、及び日本の音楽をどのように感じ、それを研究したかを知るうえで貴重な論文であり、また、日本語の韻律、文体、歴史を研究した結果、詩篇を万葉集長歌風に翻訳するに至った経緯は、日本語で神を讃美する歌を歌う、ないし唱詠するということを考えたとき、示唆に富むものと思われる。

なお、チェンバーレンのこの発表後、討議（Discussion）があり、J. L. アメルマン（アメリカ・オランダ改革派教会宣教師）、E. M. サトウ（イギリスの外交官）、H. フォールズ（スコットランド一致長老教会宣教師）、C. ブランシェー（アメリカ聖公会司祭）、W. B. ライト（イギリス海外福音伝道会宣教師）が発言、チェンバーレンがこれに答えている。この部分も含めて訳出した。

B. H. チェンバーレン

1880年4月13日発表

特に定められた規則があるわけではないが、日本アジア協会の慣例として、協会が行うことの中にキリスト教への改宗者が生まれるような活動をするなどとは含まれないことになっている。この論文のタイトルを説明するにあたり、わたしがこの論文を書いた目的を述べるのが適当であろう。それはまず、日本アジア協会と筆者が、宣教師を送った様々な団体が当然自ら行うものとみなしている分野に蚕食する意図があるなどと思われたいためである。われわれが聖書の外国語訳を求めるのは当然のことながら宣教師に対してであり、また、宣教師によって、特に多大な労力の結果、聖書の日本語訳の一部は完成をみている。しかし、聖書は厳格な信仰上の問題だけではなく、そのことから離れて様々な観点から考察されてもよいと思う。外国人が、そして教養のある日本人の多くが認めるところだが、中国語や日本語を学ぶヨーロッパの学生は、後の調査研究のあらゆる段階で足をとどめたくないと願うなら、まず最初に、論語や孟子からとりかかるべきである。と同様に、日本人が西洋の知的土壌について、特にイギリス及び英語圏の知的土壌についての十分な見識を身につけたいと望むならば、誰でも例外なく旧約聖書に書かれていることを理解することから始めなければならない。聖書の影響は多大であるが故に思想・感情は言うに及ばず、言語そのものをも形づくってきた。したがって、あらゆる階層の人々が聖書に親しみ、その結果、名句、たとえ、引喩が数えきれないほどもちいられるようになった。人々が物事を聖書に立ち戻って考えるので、聖書に不案内なものにとってはあらゆる書物や会話の内容は多かれ少なかれ意味が不明なものになってしまうであろう。それ故、キリスト教へ改宗させる活動からはなれて、日本に住む人々が聖書、諸書の読むに耐える翻訳を持つべきであるということは、進歩、すなわち日本の欧化に関心をいだくすべての人々にとって切なる願いであるに違いない。そして、こうした翻訳を行うに際し、進めてゆくべきもっとも適切な方法を静かに論じ合うのに、日本アジア協会の会場ほどふさわしい場所はないと考えているのである。

今ここで、わたしは論じ合うとだけ言っている。つまり不幸にもわれわれはここで論じ合わざるを得ないのである。われわれが取り扱う日本語という言語は近代ヨーロッパの言語のように、その起源から聖書という鑄型で鑄造され続けられてきた言語でもなければ、未開部族のその部族だけで通用する言語のように、まだ白紙の状態でもないからである。どの観点からみても困難なことばかりである。いや、ほとんど不可能に近い。そして、選択し、検討する範囲が

鋳型に入れ続けられてきた状態と、まったく白紙の状態の中間に位置するという不都合さもある。それ故、わたしは皆様にお許しを願わなくてはならない。それは、すぐに目的に向かい、二、三の詩篇（聖書中の一書で、まだ日本語訳が刊行されていない）の試訳を日本アジア協会に提出するというのではなく、翻訳者は翻訳の仕方を決めなければならないが、その諸条件に関して少しくどいと思われるほどの考察を、まず始めるということである。こうした諸条件を完全に理解して、はじめて人は何か方法論に関する評価について発表する資格を有することができるのである。

さて、まず、日本語という一つの言語には実は三種類の異なった言葉があるということを心にとどめておくべきであろう。なるほど三つとも共通の基盤があり、歴史的関連もあるが、それにもかかわらず文法において、語彙において相互の間には、はっきりとした相違があり、それはヨーロッパ各国の言語であれば別々に分類されるほどのものである。その三種類とは、和文[体]、漢文[体]と、口語[体]である。そして、それぞれ一つ一つが、また、細分化されているのは地域的、時代的に広く長い領域にわたって語りつがれ、書きつがれてきた言葉としてごく当然のことである。特に和文[体]の場合、上代[奈良時代まで]の特有のものと、中古[平安時代]の特有のものとをはっきり区別する必要がある。上代とは、古事記の神話伝説と、祝詞という神に対し申し述べる言葉、万葉集の歌などで、われわれの時代区分では八世紀、あるいはそれ以前から今日まで伝わってきたものである。そして、そのおかれた位置はホメロスのギリシャ語にも比肩しうるであろう。

十世紀、十一世紀、そして、十二、十三世紀の間に日本文学の代表的作品の多くが、この中古特有の言葉で書かれた。中古の言葉が上代の言葉と違っている点は、主として古語とその語形の喪失、ある不変の法則の下での文法の体系化。そして、洗練さ、及び力強さの喪失等である。これらのことは、古代ギリシャに起こったことと同様なことが日本にも起こったと言える。

さて、次に扱う言葉—漢文[体]—について言えばギリシャ語にもそれに相応するものもなく、いやそれどころかヨーロッパにもまったく対応するものがない。わがイギリスでもフランス語の要素が入ったことで英語は修正されたが、漢文体に相応するものはない。漢文の漢語は本来もつ意味から、その語源的な意味がまったく抜き取られてしまった。そして、それによって文法上も徹底的な変化を引き起こし、古い形の痕跡をもほとんどすべて破壊してしまった。現代の文書、新聞、書簡等のほとんどはこの文体で構成され、他の二種類の言葉にだけ通じている人にとっては、これらのものが理解不可能なものになってしまうであろう。

最後に口語[体]であるが、ギリシャ語との比較を続けるならば、この国における現代ギリシャ語と呼んでもさしつかえないであろう。しかし、混成語[体]であり、それ以前に消滅したものの残余である。これは固定化されることは決してなく、現在も英語や新しい思想の影響の下で、

日々刻々変化しつつある。

さて、目下の問題は、これら互いに違った三種類の言葉のうち、聖書の翻訳をするにあたってどれを採用すべきかということである。口語体は一般庶民的であるということと、及び標準化が必要であるということ、まず排除される。これはけっしてわたしの個人的偏見ではなく、一般に認められている事実であるということは、日本人の平信徒であれ外国の宣教師であれ、宗教上の著作に口語体を実際に用いようとした人がいないという事実が示している。漢文体は他の理由で排除されなければならない。つまり、それは無用の難解さのために、漢文体の持つ利点が相殺されてしまうことがあるということである。残るは二種類の語群を持つ和文体ということになる。これまで「創世記」と「新約聖書」を翻訳する方向として中古語の文体を採用してきた。そして、わたしは次のように確信するにいたったのである。すなわち日本の読者層に一般に受け入れられる媒体として、和文体が先にのべた他の二種類の言葉に比べて勝っていることは、疑問の余地がないということである。しかし、同時にわれわれは次の二つの事実を目をそむけてはならない。一つは、文法上、文体上、のあらゆる法則を繰り返し破ることなくしては、直訳に近いものさえできないということと、もう一つは、この和文体はそれでも理解しにくいので、こうして法則を破れば、教育をさほど受けていない階層には、ほとんど理解されなくなってしまうということである。これらのことは、できるかぎり正確さを期すかぎり、考えなければならないことである。それ故、洗練されていて、理解しやすく、正確であるということは同時に問題とされることはない。正確で、かつ理解しやすいということだけでも同時に成立しない。そして、現時点で考えるもっとも現実に即した方法は二通りの訳を活字にするということのように思えるのである。一つは和文体で意識すること、詩歌の場合できるかぎり日本人の好みに合わせるために韻文にすべきである。もう一つは厳密な逐語訳である。意識を解説して理解する。また、このことによって意識の正確な意味を確定することにもなると言えるであろう。逐語訳の場合、言うまでもなく日本語の文章における一般的な規則に従わせようとすることは、いっさいすべきではない。<sup>(注一)</sup>

詩歌について、ここですすめた韻文化された意識に関して、あいにく、日本の文学史から派生してくる考慮すべき事態が起こってくる。これは、才能のある日本人には克服できないということはないであろうが、外国人が中古の言葉で一般の人に理解できる文体の翻訳文をつくらうとすると、すべての道は閉ざされてしまい、上代の言葉を表現の手段として採用する方向へ向かわせるように、私には思える。このように考えるにいたったのは、これまで中古の言葉で書かれた和歌の文体を扱ってきたためである。ほとんどの和歌が実際、Mizhika-uta, これは、Short Stanzas で、三十一文字だけでなりたっており、外国のどんな詩の翻訳にも、詩篇の翻訳にさえ不可欠な長い詩句、すなわち、広がりを持ち、長く続いていく詩文といったものは存

在しない。もっとも、詩篇にはそれほど長いものがあるわけではないが。したがって中古の言葉には手本とすべき標準化されたものがないということである。死語、あるいは過去の言葉で、標準化されたものもないのに現していくことは不可能である。これは西洋の場合と比較してもまったく不可能な状態だと思われる。日本では、現在ものを書く人間は、その人が使う単語、成句、専門用語のすべてに対して、それを用いた根拠となる章句を引用できることを望む傾向にあるからである。それ故結局、われわれは最古の日本語の形式に戻らざるを得なくなる。そして、ここでこそすべての必要条件が満たされることが判るのである。万葉集には何百もの作品があり、古事記には詩篇と大体同じくらいの長さの作品が含まれている。これらの作品は様々な歌人が多岐にわたる主題のもとに書いてきたものだが、われわれに語彙のすべてと、歌の構造を教えてくれる。これらの歌の構造と語彙が既に古めかしいものであることは疑問の余地はないが、その作品が熟読するに値する近世の歌人達<sup>(註二)</sup>によって、自分の歌を表現しなければならない時の唯一、有効な道具だとして、今なお選ばれ続けてきているのである。

既に述べたように、翻訳の仕方をめぐり、その実現性に関して数々の考慮せざるをえない異議申し立てがあった。それは、わたしが個人的に友人と話をした時、ここですすめている上古の和文体で意識していくということに対し、理解されることは難しいのではないかという異議申し立てであった。しかしながら、難解であるということと、理解不可能ということは別々のものである。教育を受けていない日本人、もしくは、他の面では教養があってもユダヤ人の歴史・思想についてはまったく何も知らない人にとっては、詩篇をどのように訳したところで、ヘブライ語の原文と同じくらい訳の判らないものになってしまうであろう。ある程度の予備知識と口頭の説明が常に必要であるということは当然のことと考える。そして、この予備知識と口頭の説明とともに、古代日本語による意識と逐語訳とを相互に照らし合わせることで、たとえば外国人にとっては当惑を招くものとなっても、古代日本の詩的表現が日本の学究の徒にとって、特別な困難を与えることはないはずである。

日本アジア協会のメンバーで、古代の日本語に注目して研究に専心したことなどない人が、韻文訳に際しても精読が容易となるために、わたしは英語の脚注で主な難解な点に説明を加えた。と同時に、日本語でもほんの僅かな数ではあるが、注と内容表題を加えた。これは、詩篇の、各篇それぞれの一般的意義を日本人読者が理解する上で必要だと思えたからである。選んだ詩篇は、第一篇、第十九篇、第二十三篇、第百篇、第百十三篇、第百十四篇、第百十五篇、第百二十三篇、第百二十四篇、第百二十七篇、第百二十八篇、第百三十三篇である。ここに掲載する翻訳の実例が韻文訳であれ、逐語訳であれ、優れていると言える資格はない。この翻訳が原文からではなく英語訳に基づかざるをえなかったため、重訳にすぎないからである。出来

るかぎり事前の措置はとったつもりである。詩篇の翻訳は英文祈禱書を底本とした。そして、Wette の *Commentar über die Psalmen*<sup>4</sup> と Delitzsch の *Biblical Commentary on the Psalms* (英語版)<sup>5</sup> とを比較検討して、すべての訳に修正を加えた。とはいえ、逐語訳の方は後者の注解書に厳密に従っている。それでもなお、二重のフィルターを通して訳すという危険を冒してしまったことは明白で、そのことをいくら強調してもしすぎることはない。ユダヤ人の言語の場合、まず最初にアーリア語系の言語に翻訳し、ついでウラル・アルタイ語系に訳されれば、極端な文体となり、文章として危機状態になってしまうのである。ヘブライ語の十分な知識は他の専門知識ばかりでなく、聖書を翻訳するのに必要条件として欠くことのできないものである。それ故、ここではただ一つの翻訳の方法を指し示し、二、三の例でそれを説明するということだけにとどめるつもりである。

注一 いわゆる直訳、すなわち逐語訳の文体については、日本語におけるかなり前途有望な要素が残されているように思われる。それをすでに取り入れている学校もいくつかあり、日本人の精神的要求にも見事に適合している。それは文法に反した用法ではあるが、その実用性ということによって十分文章の生硬さは補われている。というのは、中国語に訳す場合認められ、英語の場合も同様のこととして考えられていることだが、融通がきかず、と同時に複雑な日本語の構造の中に、かなり自由に展開している外国語の表現方法を封じ込めようとすることは、単なる無駄な努力であるからである。

注二 例：[賀茂]真淵、本居[宣長]、[加藤]千蔭、橘守部、高畠式部、橘東世子

SAN-BI NO UTA NO DAI ICHI. (Ps. 1.)<sup>6</sup>

YOSHI-ASHI-BITO NO HATE NO TAGAFU WO YOMERU UTA :

Arachi-wo ga      Sakashira tohazu  
 Saga-mono ga      Ihe ni i-tatade  
 Utsutahe ni      Ama tsu Sumera no  
 Shiki-maseru      Ōho mi koto-nori  
<sup>5</sup>Akarahiku      Hiru shi mo manebi  
 Nubatama no      Yo-narabe omofu  
 Sachihahi ya      Kaha-bi ni tatasu  
 Tsuga no ki no      Iya tsugi-tsugi ni  
 Ha ha shi mo      Toha ni kare sede  
<sup>10</sup>Mi ha shi mo      Musubanu aki naku  
 Uruhashiku      Nihohi-tsutsu aru ni  
 Yatsuko-ra ha      Kaku narazu koso  
 Aki-kaze no      I-fuki-chirasu  
 Momiji-ba to      Use ni use kere  
<sup>15</sup>Kaku bakari      Ama tsu Sumera ga  
 Ōho mi to ga      Ye-sake-matsurade  
 Uma-bito no      Tomo ni ye-irade  
 Horobi-keñ      Yoki hito koso ha  
 Iyoyo sakayedo.

讃美之歌第一

よしあしひとのはてのたかふを詠る哥

<sup>あらち</sup>荒知雄<sup>を</sup>か。さかしら問はす。  
 さかものか。家にいたゝく。  
 うつたへに。<sup>あまつすめら</sup>天津皇の  
 うるはしき<sup>おほみ</sup>大御ことのり。  
 あから引。ひるしも<sup>まね</sup>学ひ。  
<sup>ねは</sup>鴛羽玉の。よならへ思ふ。  
<sup>さち</sup>幸はひや。<sup>かはび</sup>川邊に立す。  
 つかの木の。いやつきつきに。  
 葉はしも。<sup>とこ</sup>常盤にかれせて。  
 實はしも。結はぬ秋なく。  
 うるはしく。香ひ宛あるに。  
 やつこらは。かくならすこそ。  
 穠風の。い吹ちらす。  
 紅葉ばと。うせにうせけれ。  
 かくはかり。天津皇か。  
 大御<sup>とか</sup>咎 ゑさけまつらて。  
<sup>うま</sup>良人の。ともにいらて。  
 亡ひけん。<sup>よき</sup>淑人こそは。  
 いよゝ栄えと。



1,2.<sup>7</sup>〈あらちを〉（荒男）と〈さがもの〉（悪者）は「たちの悪い猛々しい人」という意味。〈が〉はもともと所有の関係を示すために用いられた。これに対し〈の〉は常に主格と呼ぶべきものを指し示している。しかし、後に〈の〉の用法は逆転した。〈わが〉は〈が〉の古くからの意味だけをとどめており、「わたしの」、「わたくしたちの」という意味である。〈い〉は、ここでも例外ではなく格別の意味のない接辞（Expletive）である。3.〈あまつすめら〉「天帝もしくは上帝」。これは漢文による。〈てんてい〉〈しょうてい〉と発音する。文字通り「天の君主」「至上の君主」の意。“GOD”という言葉に対し、最も近い意味である〈かみ〉（神）という言葉の方がよいとする意見もあるが、これは単に「先祖の霊」をさすもので、一般に複数形として理解されているという不利益な面が加わる。それ故、〈あまつすめら〉は“GOD”に対し選んだ言葉。〈おほきみ〉〈あまつおほきみ〉〈あがおほきみ〉等は、英語 韻文訳の“THE LORD” “OUR LORD”にあたるものである。散文の訳では、ヘブライ語の“JAHOVAH”は後者の訳語“OUR LORD”として現在でもそのまま残り、用いられている。4.〈しきませる おほみことのり〉は「天帝自らのご意志」。敬語の〈ます〉は現在では乱雑に使われているが、古代では神と皇族にのみ使用されていた。5.〈あからひく〉は〈ひる〉に掛かる枕詞。〈まねび〉は〈まなぶ〉の古語。6.〈ぬばたまの〉は〈よ〉に掛かる枕詞。〈よならべ〉「毎晩」。7.〈さちわひ〉は〈さいわひ〉の古語。〈び〉は〈べ〉の古語で「辺」の意。〈たたす〉は〈たつ〉の形からその用法がうまれた。単に上品な言い方としてだけ用いられる。8.〈つかのきの〉は〈つぎつぎ〉に掛かる枕詞。だが、ここでは本来の意味の「榎の木のように」で、〈の〉は〈のごとく〉の意。〈いや〉は〈いよいよ〉の古語。9.この一行は四音節だけである。四、六、八音節をとるという破格は、五七調の詩形の単調さを和らげるために装飾的用法として古代においてはよく用いられていた。二番目の〈は（わ）〉係助詞。〈とわに〉は「永久に」。〈かれせで〉は「枯れで」の古語。11.〈にほふ〉は、古語では「光沢があって美しい」「栄える」の意。14.〈もみじばと〉は「秋の紅葉した葉のように」の意。（「紅葉した葉」は、詩篇原文の「もみ殻」の代用語。）17.〈うまびと〉は「公正で徳の高い人」。18.〈けん〉、ここでは終止形であって連体形ではない。〈いよいよ〉は〈いよいよ〉の古語。

#### 同直譯<sup>8</sup>

不信心ノ勸言ニ歩マス而メ罪人ノ道ニ立ス而メ逆人ノ黨ニ座セス返テ彼レノ楽ミハエホハノ  
 法ニ於テアリ而メ彼レカ昼夜彼レ[上帝ヲ指]<sup>9</sup>ノ法ヲ考フル所ノ人ハ幸ニナリ而メ彼レハ  
 川流ノ傍ニ植ラレ夫レノ時節ニ於テ夫レノ實ヲ生シ而メ夫レノ葉ハ枯レサル所ノ樹木ノ如クア  
 リ然メ彼レカナス所ノ物ヲハ彼レカ為トク  
 不信心ハカクナラス返テ彼レ等ハ風ノ吹拂フ所ノ麥殻ノ如クアリ故ニ不信心ハ裁断ニ於テ立  
 アタハス而メ罪人ハ善人ノ會聚ニ立アタハス如何トナレハエホハハ善人ノ道ヲ知ル[知ルハ則  
 好シ給フノ意ナリ]返テ不信心ノ道ハ滅亡ス

## DAI ZHIFU KU. (Ps. 19.)

## 第十九

AMA TSU SUMERA NO HI WO MOTE TSUCHI WO  
 TERASHI MI NORI MOTE HITO NO KOKORO WO  
 TERASHI-TAMAFU WO MEDE-TATAHETE YOMERU UTA :

天津皇の日をもてつちをてらし みのり  
 もてひとの心をてらし玉ふを めてたゝへ  
 て詠るうた

Hito no goto	Koto-tohi ha sede	ひとの <sup>と</sup> 胡と。ことゝひはせて。
Hisakata no	Ame ni nori ari	<sup>ひさかた</sup> 久堅の。あめにのりあり。
Wataru hi no	Sora ni kowe ari	わたるひの。空に聲あり。
Akane-sasu	Hiru mo ahi-tsuge	あかねさす。ひるも相告。
<sup>5</sup> Nuba-tama no	Yoru mo katar'ahi	ぬは玉の夜もかたらひ。
Uma no tsume	I-tsukusu kihami	うまのつめ。つくすきはみ。
Funa no he no	I-hatsuru made ni	<sup>ふな</sup> 舟の <sup>へ</sup> 鱸の。いはつる迄に。
Ama tsu Kimi ga	Mi idzu wo tatahe	あまつきみか。みいつをたゝへ。
Mi te-buri wo	Shimeshi-matsuru ha	み手振を示しまつるは。
<sup>10</sup> Kumo no'he ni	Hi wo yadosu beshi to	雲の辺に。日をやとすへし。と
Kake-maku mo	Ama tsu Sumera no	<sup>かけまく</sup> 掛巻も。天つ皇の。
Tsukurashishi	Futo mi araka yu	つくりしゝ。ふとみあらかゆ。
Waka-kusa no	Tsuma ni ahañ to	若艸の。つまにあはんと。
Mukogane no	Kado idzuru goto	むこかねの。門出ること。
<sup>15</sup> Mokoro-wo ni	Wa ha makeme ya to	<sup>もころを</sup> 如己男に。 <sup>わ</sup> 我はまけめやと。
Masura-wo no	Kihohi-afu goto	ますらをか。きほひあふこと。
Toho-yama yo	Nobori-ide-tachi	遠山よ。のほりいてたち。
Kuma ochizu	Nishi no umi made	<sup>くま</sup> 隈おちす。西の海まで。
Ura-ura to	Terasu hi-kage no	うらうらと。照らす日影の。
<sup>20</sup> Kushi-kage wo	Mede-hayashi-keri	<sup>くし</sup> 奇影を。めてはやしけり。
Shika mi idzu	Furi-tamahi-keñ	しか <sup>みいつ</sup> 御稜威。ふり給ひけむ。
Oho-Kimi ga	Kiyoki mi mori wo	大きみか。みのりかしこみ。
Moru tami no	Saga ha i-harahi	もる民の。さかはい拂ひ。
A ga Kimi ga	Kataki mi koto wo	<sup>あか</sup> 吾きみか。かたきみことを。
<sup>25</sup> Kiku tami no	Ozo ha uchi toke	きくたみの。 <sup>おそ</sup> 愚はうちとけ。
Ma-gokoro wo	I-yorokoboshi	真心を。いよろこほし。
Omi ga me mo	Hiraki-satoshite	<sup>おみ</sup> 臣が目も。ひらきさとして。
Kegare sezu	Managari mo sezute	<sup>けか</sup> 穢れせず。まなかりもせず。

Tokoshihe ni	Awo-hito-gusa wo	とこしへに。 <sup>あをひとくさ</sup> 蒼生を。
<sup>30</sup> Hiki-maseru	Oho mi nori koso	<sup>ひき</sup> 率ませる。大みのりこそ。
Natsu-mushi no	Susur'afu hana no	夏虫の。すゝらふ花の
Tsuyu yori mo	Kaguhashi kerashi	露よりも。かくはしけらし。
Yo no hito no	Tafutomi-negafu	世の人の。たふとみ願ふ。
Ku-gane yu mo	Ye-maku-hoshi-kere	くかねゆも。ゑまくほしけれ。
<sup>35</sup> Mube shi koso	Mi koto kashikomi	むへしこそ。みこと <sup>かしこ</sup> 恐み。
Somukazuba	Sachi to naru mono	そむかすは。 <sup>さち</sup> 幸となるもの。
Ono ga ozo	Shiru hito nakedo	おのかおそ。しる人なけと。
Iha-buchi ni	Kakururu saga mo	岩渕に。かくるるさかも。
Oho-sora ni	Hibikeru saga mo	大空に。 <sup>ひい</sup> 響けるさかも。
<sup>40</sup> Kiyome-mashi	I-harahi-tamahi	きよめまし。いはらひ給ひ。
Kuchi wo mote	Wa ga noru koto	くちをもて。わかのこと。
Kokoro mote	Wa ga'mofu koto mo	こゝろもて。わかもふことも。
Yurugi naki	Chi-biki no iha to	<sup>ゆるぎ</sup> 動揺なき 千引の石と。
Tanomi aru	Waga Oho-kimi ha	たのみある。わか大きみは。
<sup>45</sup> Mede-tamahanañ !		めてたまは南

1. 〈ごと〉は〈ごとく〉の古語。〈こととひ〉は「ものを言う」の意。2,3,4,5各行の前半は枕詞。〈のり〉は「言う」。6,7.「全地に」と「世界の果てに」の古語で、歌にだけ用いられる言葉。〈ふなのへ〉は〈船の艫〉と書く。9.〈みてぶり〉は〈神の業〉。〈は〉は、ここでの意味をしいて言えば、「というのは」である。10.〈へ〉は〈うえ（上）〉である。11.〈かけまくも〉、うやうやしく心にかけて思うとき使われる言葉で、次のように説明される。〈いやしきくちにかけてとなへ たてまつらんを おそれみつつましき というなり：（まく）は、（む）をのべたるなり〉。12.〈つくらしし〉は敬語として用いられる使役接語。〈ふとみあらか（太御在所）〉は「御殿」。〈ゆ〉は〈より〉の古語。13.〈わかくさの〉は〈つま〉に掛かる枕詞。この部分は原文の意味から多少離れる必要がある。日本の歌人にとって花婿が寢室を去る時、喜びに光輝くということは想像もつかないことであろう。14.〈むこがね〉は〈花婿〉。15.〈もころを（如己男）〉は「歴戦の勇士」。〈わは〉以下は、「戦いにまけないようにしようと思う」の意。〈わ〉は（〈わが〉を別にして）〈われ〉に対する古語。17.〈よ〉は〈より〉の古語。18.〈くまおちず〉は〈すみずみまで〉の意。複合語における〈くし（霊）〉は「不思議だ」「神秘的な」等の意。23.〈もる〉は〈まもる〉の意。24.〈あ〉は古語、第一人称の代名詞。25.〈おぞ〉は「愚か」の意。26.〈いよろこばし〉の〈よろこはし〉の古語。27.〈おみ（臣）〉は「臣下」「家来」。28.〈まながり〉は〈まがり〉の原型。〈せずで〉は〈せで〉の古語。30.〈ひきませる〉は「指導する」「ひっぱって揺り動かす」の意。34.〈くがね〉は「黄金」。36.〈さち〉は〈さちわい〉、「幸福」「恵み」と同じ意味。38.〈いはぶちに〉は「個人的に」の意。（文字通りには岩で囲まれた淵。）41.〈こと〉（言）。42.〈こと〉（事）。43.〈ちびき〉は「それを引き動かすのに千人もの力が必要なもの」。〈と〉は〈～のように〉。45.〈……なん〉は願望の意を表す。

注：この訳、及び直訳の双方とも Delitzsch の *Biblical Commentary on the Psalms* からではなく、英文祈禱書から翻訳した。

## 同〔直譯〕

天ハ上帝ノ榮譽ヲ語り而メ空ハ彼レノ手業ヲ言ヒ顯ハス一日ハ他日ニ言ヒ而メ一夜ハ他夜ニ  
 信用サス言語モ談話モ非ス然シナカラ彼等ノ聲カ彼等ノ間ニ聞ユ  
 彼等ノ音ハ諸國ニ出テ而メ彼等ノ言語ハ世界ノ果迄出ヌ婿カ彼レノ聞ヲ出ル如ク出テ而メ偉  
 丈夫カ彼レノ競争スル事ヲ喜フ如ク喜ヒ天ノ最モ遠キ所ヨリ出立 而メ又夫レノ果迄馳廻リ而  
 メ其暖氣ヲ以テ萬物ヲ照ラス所ノ太陽ノ為ニ彼レカ [上帝ヲ指] 彼等[天ト空トヲ云]ニ於テ幕  
 ヲ張キ  
 エホハノ法ハ魂ヲ改化サスル潔キ法ナリエホハノ誓ハ確定ナリ而メ愚人ニ知識ヲ給フエホハ  
 ノ掟ハ正シクアリ而メ心ヲシテ歎ハシムエホハノ命令ハ清クアリ而メ目ニ光ヲ給フエホハノ畏  
 レハ潔白ナリ而メ永久ニ存スエホハノ裁断ハ直ク而メ全ク正クアリ  
 彼等ハ [法誓等ヲ云] 金ヨリモ多クノ純金ヨリモ欲セラルヘシ猶更蜂蜜ト蜂房ヨリモ甘シ將  
 又汝ノ僕 [自カラヲ云] ハ彼等ニ依テ教ラル而メ彼等ヲ守ル事ニ於テ大ナル褒美アリ彼レカ  
 幾度犯法スルヲ誰レ知ル能フ汝 [上帝ヲ指] ヲ我カ隠レタル咎ヨリ我ヲ清メヨ又ハ彼等カ [次  
 ニ云ヘル悪ヲ云ナリ] 我ヲ司トラヌ様ニ汝ノ僕ヲ驕レル惡ヨリ救ヘヨ然レハ我ハ 潔ク而メ  
 大罪ヲ受サラントス吾カト吾 救主ナルエホハヨ 吾口ノ言語ト吾心ノ考ヘヲシテ常ニ汝ノ目ニ  
 叶ハセシメヨ

DAI NI ZHIFU SAN. (Ps. 23.)

TATAHE-UTA :

A wo moru ha Ame Shiroshi-mesu  
 Kimi nareba Nani ka kaku beki  
 Uruhashiku Nagusame-masañ  
 Nade-masañ to Kiyoki kaha-be ni  
<sup>5</sup>Ma-kusa kahi Makoto no michi ni  
 Atomohite Nigoreru kokoro  
 Ma-gokoro ni Kahe-tamafu-rashi  
 Shika bakari Uruhashi Kimi no  
 Hiki no mani Mi nori wo tsuwe to  
<sup>10</sup>Kashikoku mo Taganete yukeba  
 Nuba-tama no Kuraki mi kuni ni  
 I-yuku to mo Ani ojime ya mo  
 Iya hi keni A wo seme-kitaru  
 Ada-bito wo Nagome-masañ to  
<sup>15</sup>Nube n'uchi ni Ama tsu mi te mote  
 Mi ke tamahi Oho mi ki tamahi  
 Minanowata Ka-guroki kami ni  
 Kushi-abura Sosogi-tamaheba  
 Tamagiharu Inochi no kagiri  
<sup>20</sup>Mi megumi shi Kaumuri-matsuri  
 Tokoshihe ni Tsukahe-matsurañ  
 Kimi ga mi araka ni.

第二十三

たゝへうた

あをもるは。<sup>あめしろしめす</sup>天所知召。  
 きみなれは。なにかかくへき。  
 うるはしく。<sup>なくさめ</sup>慰まさむ。  
<sup>なて</sup>撫まさんときよき川邊に。  
 まくさかひ。まことの道に  
 あともひて。濁れるこゝろ。  
 真心に。かへ玉ふらし。  
 しかはかり。うるはしきみの。  
<sup>ひき</sup>率のまに。みのりを杖と  
 かしこくも。たがねてゆけは。  
 ぬは玉のくらきみにゝ。  
 い往とも。あにおちめやも。  
 いや日けに。あをせめ来る  
<sup>あた</sup>鱒ひとを。<sup>なこめ</sup>和まさんと。  
 野邊ぬちに。天津御手もて。  
<sup>みけ</sup>御食給ひ。<sup>き</sup>大御酒玉ひ。  
 みなわた。かくろき髪に。  
<sup>くしあふら</sup>奇油。そゝき給へは。  
 たまきはる。いのちのかきり。  
 御恵し。かうむりまつり。  
 とこしへに。つかえまつらん。  
 きみか<sup>みあらか</sup>御在所に

5. <まぐさかひ>「よい馬草を食べさせて」。6. <あともひて>「率いる」。8. <うはし>は<うるはしき>のこと。古語においては、古文の用法において、連体形が求められるところで、しばしばこのように終止形が認められる。9. <ひきのまに>「神の導きに従って」。10. <かしこくも>は<かけまくも>に相当する。固有な用法、「恐れおののきつつ」。しかしこの場合、ほとんど敬語的修辭。<たがぬる(手束)>「頼る」。12. <いやひけに>「日毎に」。14. <なごむる(和)>「おだやかになる」「和らげる」。15. <ぬべぬちに>は<のべのうちに>の古語、「荒れ野に」。<あまつみて>「神の手」。16. <け>「食物」。<き>「酒」。17. <みなわた>は<かぐろき>に掛かる枕詞。<か>は虚辭。19. <たまぎはる>は<いのち>に掛かる枕詞。

# 同〔直譯〕

エホハハ<sup>ワガボクシヤ</sup>吾牧者ナリ<sup>ワレ</sup>我ハ<sup>フ</sup>不足セ<sup>ソク</sup>ジ<sup>カ</sup>彼レカ<sup>アオクサ</sup>青草ニ<sup>オイ</sup>於テ<sup>ワレ</sup>我ヲ<sup>フ</sup>シテ<sup>カ</sup>卧サシメ<sup>セイリウ</sup>彼レカ<sup>カタハラ</sup>清流ノ<sup>ワレ</sup>傍ニ<sup>ヒキ</sup>我ヲ<sup>カ</sup>率キ<sup>ナ</sup>彼レノ<sup>タメ</sup>名ノ<sup>カ</sup>為ニ<sup>ワガタマシヒ</sup>彼レカ<sup>カイフク</sup>吾<sup>カ</sup>魂ヲ<sup>ワレ</sup>改復シ<sup>ナホ</sup>彼レカ<sup>ミチ</sup>我ヲ<sup>ヒキ</sup>直キ<sup>ヒキ</sup>道ニ<sup>ヒキ</sup>率ウ

然レハ<sup>サ</sup>我ハ<sup>ワレ</sup>死陰ノ<sup>シイン</sup>谷ニ<sup>タニ</sup>歩行ト<sup>アユム</sup>モ<sup>ワレ</sup>我ハ<sup>イツ</sup>何レノ<sup>ガイ</sup>害ニ<sup>オジ</sup>テモ<sup>イ</sup>忙ント<sup>カン</sup>セス<sup>ナンヂ</sup>如何ト<sup>シヤウテイ</sup>ナレハ<sup>サス</sup>汝〔上帝ヲ指〕

ハ<sup>ワレ</sup>我ト<sup>トモ</sup>共ニ<sup>ナンヂ</sup>アリ<sup>シ</sup>汝ノ<sup>キツエ</sup>指揮杖ト<sup>ナンジ</sup>汝ノ<sup>ツエ</sup>杖ト<sup>ワレ</sup>我ヲ<sup>ナグサ</sup>慰ム<sup>ワレ</sup>我ヲ<sup>カコク</sup>苛酷スル<sup>ヒト</sup>人ノ<sup>ガンゼン</sup>眼前ニ<sup>ナンヂ</sup>汝ハ<sup>ワレ</sup>我ニ<sup>ムカヒ</sup>向テ<sup>シヨクダイ</sup>食臺ヲ<sup>マウ</sup>設

ケ<sup>ナンヂ</sup>汝ハ<sup>アブラ</sup>油ヲ<sup>モ</sup>以テ<sup>ワガカウベ</sup>吾<sup>ウルホ</sup>頂ヘ<sup>サウシテ</sup>ヲ<sup>ワガハイ</sup>潤シ<sup>ミ</sup>而メ<sup>ミ</sup>吾盃ハ<sup>ミ</sup>満ツ

吾<sup>ワガ</sup>一生涯<sup>イツシヤウガイサヒハイ</sup>幸ト<sup>メグミ</sup>恵ト<sup>ノ</sup>而<sup>ミ</sup>已<sup>ワレ</sup>我ニ<sup>オヨバ</sup>及ント<sup>サウシテ</sup>シ<sup>ワレ</sup>而メ<sup>マタエイキウ</sup>我ハ<sup>イヘ</sup>又永久ニ<sup>スマ</sup>エホハノ<sup>スマ</sup>家ニ<sup>スマ</sup>住ントス

## DAI HIYAKU. (Ps. 100.)

## 第百

AMA TSU SUMERA WO HOME-TATAHE-MAHOSHIKI WO

天つ皇をほめたゝへ まほしきを

YORODZU NO TAMI-KUSA NI SUSUMURU NO UTA:

萬のたみ草にすゝむるの哥

Ono dzu kara Ware ha ohi sezu

おのつから。われはおひせず。

Mite mochite Ama tsu Sumera no

御手もちて。天津皇の。

Uruhoshiku Tsukurashi-tamahi

うるはしく。つくらしたまひ。

Mi tami zo to Mori-masu Kimi ga

み民そと。もりますきみか

5Oho mi idzu Sane tana-shirite

大御稜威。さねたなしりて。

Ame ga shita Yorodzu no hito no

あめかした。萬の人も。

Yorokobohi Utafu utahi ni

よろこほひ。うたふうたひに。

Kowe tayezu Mede-hayasanañ

声絶す。めてはやさなん。

Mi megumi shi Toha ni kare sezu

御恵し。常盤<sup>と</sup>にかれせつ。

10Mi koto shi mo Yo-yo ni kuchi senu

御言<sup>こと</sup>しも。世ゝにくちせぬ。

Umashi Kimi ga Ushi-haki-i-masu

うましきみか。うしはき伊摩須<sup>い</sup>。

Mi araka ni Mure-wi-worogami

みあらかに。羣居<sup>むれ</sup>をろかみ。

Oho mi na wo Mochi-itsukanañ

大御名を。持齊<sup>もちいつか</sup>なん。

Yo no naka no hito!

世の中のひと

1. <おひせず（不生）>。この一行は英文祈禱書に従って翻訳した。5. <さね>「本当に」。<たなしる>は<しる>の古語。7. <よろこぼひ>は<よろこばひ>が持つ固有な用法。「ともに喜ぶ」。10. <くちせぬ>は<くちぬ（不朽）>の古語。11. 終止形<うまし>は連体形<うまき>に相当する。<うしはきいます（主張座）>「神が住み、治めるところ」。（<い>は<ゐ>の方が普通よく使われる。）12. <をろがみ>は<をりががみ>から来ており、<をがみ>の古語。13. <もちいつかなん（持齋）>は願望を表す。もしくは命令法、「すすんで神を礼拝せよ」。

## 同〔直譯〕

諸國ヨエホハニ向テ歛聲ヲ出セ欣喜ヲ以テエホハニ仕ヘヨ高興ヲ以テ彼レノ前ニ来レエホハ  
ハ上帝ナリト承知セヨ彼レガ我等ヲ作り而メ我等ハ彼レノ物彼レノ民而メ彼ラノ牧場ノ羣羊  
ナリ

謝禮ヲ以テ彼レノ門内ニ入り讚美ヲ以テ彼レノ庭裏ニ入レヨ彼レニ謝セヨ彼ノ名ヲ愛稱セヨ  
如何トナレハエホハハ善シク彼レノ恵ハ絶エス而メ彼ノ眞實ハ代々ニアリ

DAI HIYAKU ZHIFU SAN. (Ps. 113.)

AMA TSU SUMERA NO HI-KAGE NI MORESHI IYASHIKI

HITO WO MEGUMI-TAMAFU WO MEDE-TATAHETE YOMERU UTA :

Kakemaku mo Ama tsu Sumera ni  
 Kashikoku mo Tsukahe-matsurite  
 Oho mi na wo Agame-tatahe-yo  
 Akane-sasu Higashi no kata yu  
<sup>5</sup>Yufu-hi sasū Nishi no sora made  
 Kefu yori ha Yorodzu yo kakete  
 Tokoshihe ni Tayezu koso agame  
 Kuni ha shi mo Saha ni aredomo  
 Ame ha shi mo Hiroshi to ihedo  
<sup>10</sup>Taka shiranu Kumo no anata ni  
 Komoriku no Miya ni wi-mashite  
 Ame tsuchi wo Mi-oroshi-tamahi  
 Chiri ni fusu Madzushiki mono wo  
 Sukuhi-age Yoki mi to mo nashi  
<sup>15</sup>Umazu-me ni Ko-dakara sadzuke  
 Sakaye aru Tozhi to shi megumu  
 Uruhashiki A ga Oho-Kimi ni

Tagufu beki are ya ?

第百十三

天津皇の日影にもれしいやしき

人を恵み玉ふをめて称へて詠る哥

掛巻も。天津皇に。

かしこくも。つかへまつりて。

大御名を。あかめたゝへよ。

あかねさす。東の方ゆ。

夕日さす。西の空迄。

けふよりは。萬世かけて。

としへに絶えずこそあかめ。

國はしも。さはにあれとも。

天はしも。廣しといへと。

たか知らぬ。雲のあなたに。

こもりくの。宮にゐまして。

あめつちを。見おろし玉ひ。

<sup>ちり</sup>塵にふす。まつしきものを。

救ひつゝ。善身ともなし。

<sup>うますめ</sup>不産女に。子寶さつけ。

さかえある。刀<sup>と</sup>自<sup>し</sup>としめくむ。

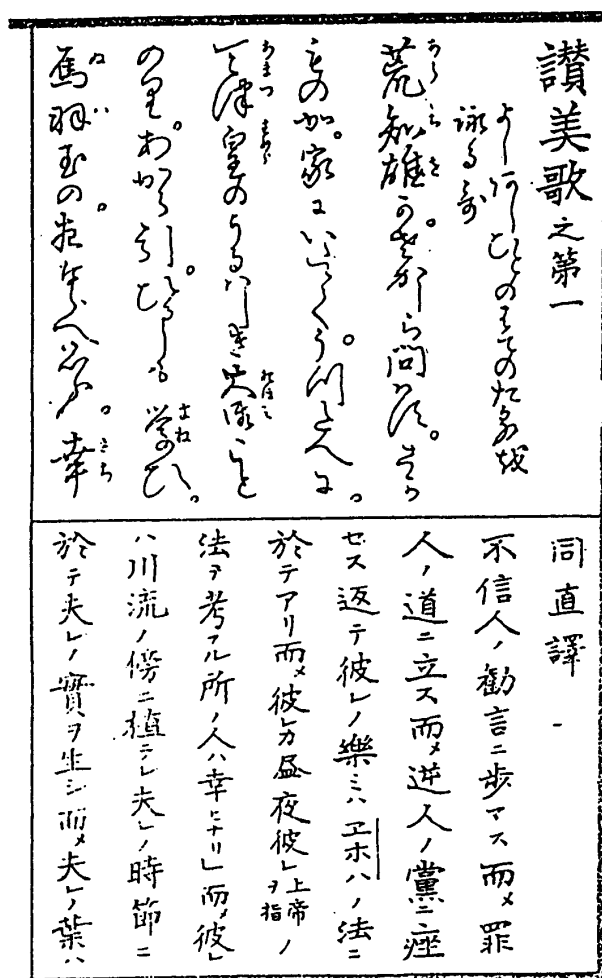
うるわしき。あか大きみに。

たたふへきあれや



同「直譯」

エホハハ<sup>バシコク</sup>萬國ノ上ニ<sup>ウヘ</sup>秀<sup>ヒイ</sup>テ<sup>カ</sup>彼<sup>エイヨ</sup>レノ<sup>テン</sup>榮譽<sup>ウヘ</sup>ハ天ノ上ニ<sup>ヒイ</sup>秀<sup>ギョクシヨウ</sup>ツ<sup>ザ</sup>玉床ニ座シテ<sup>テンチ</sup>天地ヲ遥ニ<sup>ハルカ</sup>見<sup>ミ</sup>下シ<sup>ミオロ</sup>彼<sup>カ</sup>レ<sup>シモ</sup>〔下  
ニ<sup>イヘルヒ</sup>云<sup>ジン</sup>卑人ナリ〕ヲ<sup>キゾク</sup>貴族<sup>カ</sup>則チ<sup>カニ</sup>彼<sup>テンコク</sup>レノ<sup>イフ</sup>國<sup>ノ</sup>〔天國ヲ云〕ノ<sup>キゾク</sup>貴族<sup>ナラ</sup>ニ並<sup>タメ</sup>ヘンカ<sup>ジンアイ</sup>為<sup>ヒ</sup>ニ塵埃<sup>ジン</sup>ヨリ<sup>ア</sup>卑人<sup>ハイ</sup>ヲ<sup>ハイ</sup>擧<sup>ケ</sup>ケ<sup>テ</sup>灰<sup>ニ</sup>  
堆<sup>タイ</sup>ヨリ<sup>ヒンジン</sup>貧人<sup>カカ</sup>ヲ<sup>ドウジ</sup>掲<sup>ウレ</sup>ケ<sup>ハハ</sup>童兒ノ<sup>〔ウマズメ〕</sup>嬉<sup>シ</sup>キ<sup>イェ</sup>母<sup>タモ</sup>ト<sup>ヒト</sup>テ<sup>ナ</sup>娠<sup>マ</sup>マサル<sup>ワガシヤウテイ</sup>女ヲシテ<sup>ナ</sup>家ヲ持<sup>ツ</sup>人ト成<sup>ラ</sup>シムル<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>上帝ナル<sup>エホハニ</sup>  
エホハニ<sup>タレ</sup>誰<sup>ニ</sup>カ似<sup>ル</sup>ハ<sup>ハ</sup>レ<sup>ル</sup>ヤ



— 44 —

DAI HIYAKU ZHIFU SHI. (Ps. 114.)

ISURAYERU-BITO NO FURUKI TSUTAHE NI CHINAMITE

AMA TSU SUMERA NO KUSHIKI HOMARE WO YOMERU UTA :

Kumo-wi nasu A ga toho tsu oya no  
 Koto-sayegu Kuni ideshi toki  
 Shiko tsu kuni Uchi-ideshi toki ni  
 Hisa-kata no Ama tsu Sumera no  
<sup>5</sup>Seo-yama ni Mi yashiro wo shime  
 Yo-mo no kuni Kikoshi-wi-mashiki  
 So wo mireba Umi mo michi-sake  
 So wo mireba Kaha mo shiri-zoki  
 Ashibiki no Yama mo wo-zhika no  
<sup>10</sup>Tachi-mahishi Koko shi omohoyuru  
 Michi-sakeshi Umi no ara-nami mo  
 Shiri-zokishi Kaha no haya-se mo  
 Sa-wo-shika no Tachi-mafu yama mo  
 Nani zo ya to Wa ha omohedomo  
<sup>15</sup>Chi-biki nasu Ishi wo shimidzu ni  
 Kahe-tamafu Ama tsu Sumera no  
 Mi idzu ni ha Umi yama kaha mo

Kashikomazarame ya ?

第百十四

<sup>いすらある</sup>以色列ひとのふるきつたへにちなみて

天つ皇のくしきほまれを詠る哥

雲井なす。あか遠つ親の  
 ことさへく。國出し時。  
<sup>しに</sup>醜つ國。うちいてしとき。  
 久堅の。天津皇の。  
<sup>せをやま</sup>郇山に。<sup>みやしろ</sup>御社をしめ。  
 よもの國。きこしるましき。  
 そをみれは。海も道さけ。  
 そをみれは。川もしりそき。  
 足引の。山もを鹿の。  
 たちまひし。こゝしおもほゆる。  
 みちさけし。うみの荒浪も  
 しりそきし。かはの早瀬も。  
 さをしかの。立舞ふ山も  
 なにそやと。わはおもへとも。  
 千引なす。いしを清水に。  
 かへたまふ。天津皇の。  
 みいつには。海山川も。

かしこまさらめや

1. <くもるなす> は<とほ>「遠い」に掛かる枕詞。<とほつおや>「祖先」。2. <ことさやぐ> は一般に<もろこし>「唐」に掛かる枕詞だが、ここでは「意味のわからないことをぺちゃくちゃしゃべる」という外国語を侮蔑したとき用いる本来の意味。3. <しこつくに> 「とるにたらない国」。<うち> はここでも常なる用法である虚辞。5. <せお> 「シオン」、「ユダ」に対し用いた。<しむる> 「据える」「建てる」。<よものくに> 「取り囲む地域」、すなわち「イスラエル」。<きこす> 「治める」。英訳詩篇で繰り返し使われる“His”は神という言葉に対し用いたと注解書に書かれている。7. <そ> は<それ> の古語。9. <あしびきの> は<やま> に掛かる枕詞。<をじかの> 「若い雄鹿のように」。(「雄鹿」は原文中の「雄羊」「子羊」の代わり。) 10. <たち> は虚辞。修飾語<まひし> は終止形<まいき> に相当する。これは次に続く節との対格的結合によるためである。散文では<おもほゆる> は<は> に続くであろう。13. <さ> は虚辞。<しか> はここでは<にぎり>、すなわち濁音化してはならない。<の> の後に、前掲のように<ごとく> を補う。15. <ちびきなす> は<ちびきの> と同じ。

同〔直譯〕

イスラエルカエシフトヲ出テヤコフノ家族カ異言ノ國ヲ出シ時ニ其時ニユタハ彼レ〔上帝ヲ  
指次ノ彼モ同シ〕ノ聖所ト成リイスラエルハ彼レノ領分ト成レリ  
海ハ夫レヲ見而メ逃ケヨルタンハ退キ大山ハ牡羊ノ如ク小山ハ若羊ノ如ク飛キ  
海ヨ何ヲ愁ヒテ汝ハ逃ルヨルタンヨ何ヲ愁ヒテ汝ハ退ク大山ヨ何ヲ愁ヒテ汝等ハ牡羊ノ如ク  
飛フ小山ヨ何ヲ愁ヒテ汝等ハ若羊ノ如ク飛フ  
地ヨ岩ヲ水ノ池ニ化シ堅キ岩ヲ泉ニ化スル所ノエホハハ則チヤコフノ上帝ノ面前ニ震懼セヨ

第十九  
下海ヨリ目を上げて天を望み  
この世の人の心を動かす  
あへて悔むこと  
神の御心はいつくしき  
返テ不信人ノ道ハ滅亡ス  
同。  
天ハ上帝ノ榮譽ヲ語り而メ  
空ハ彼レノ手業ヲ言ヒ顯  
ハス一日ハ他日ニ言ヒ而メ一  
夜ハ他夜ニ信用サス言語

(三頁目)

ハひや。川。谷。日。ま。つ。の。木。  
い。や。つ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。  
かれ。て。實。は。枯。れ。た。  
ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。  
ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。  
ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。  
ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。  
ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。  
枯。れ。た。所。ノ。樹。木。ノ。如。ク。ア。リ。然。レ。メ  
彼。レ。カ。ナ。ス。所。ノ。各。ノ。物。ヲ。ハ。彼。レ。カ  
為。ト。ク。し。不。信。人。ハ。カ。ク。ナ。ラ。ス。返。テ  
彼。レ。等。ハ。風。ノ。吹。拂。フ。所。ノ。變。殺。ノ  
如。ク。ア。リ。故。ニ。不。信。人。ハ。裁。断。ニ。於  
テ。立。ア。タ。ハ。ス。而。罪。人。ハ。善。人。ノ。會  
聚。ニ。立。ア。タ。ハ。ス。如。何。ト。ナ。レ。ハ。柔。ハ  
ハ。善。人。ノ。道。ヲ。知。ル。知。ル。ハ。則。好。シ  
給。フ。意。ナ。リ

(二頁目)

DAI HIYAKU ZHIFU GO. (Ps. 115.)

第百十五

TO TSU KUNI-BITO NO TAFUTOMU KAMI HA MONO IHANU  
HITO-GATA NI SHITE, WA GA TANOMU AMA TSU SUMERA  
NO MI IDZU HA MEDE-TATAHE BEKI WO YOMERU UTA:

Mi sakaye ha Kokotaki Kimi no  
Ware-ra mina Iyashiki tami  
Shika ha aredo To tsu kuni-bito no  
Hahi-fushite Worogamu oni ni  
5So ga kuchi ha Koto wo ye-norazu  
So ga me-ra ha Mono wo ye-miyezu  
So ga mimi ha Kowe wo ye-kikazu  
So ga te-ra ha Mono ni ye-furezu  
So ga ashi ha Tsuchi wo ye-fumazu  
10So ga hana ha Kawori ye-kagazu  
Koto tohazu Oto mo kikoyenu  
Shiro-kane ya Ko-gane mote seshi  
Shiko-gata wo Kashikomi-tanomu  
Yatsuko-ra mo Shiko hito-dochi zo  
15Shikasuga ni Ari nami wo su to  
Megumi ha mo Megumasu Kimi  
Mi koto ha mo Iya kataki Kimi  
Hisa-kata no Ame ni mi idzu wo  
Furi-tamafu Ama tsu Wagimi ga  
20Oho na sahe Norohi-kegaseru  
Saga-bito ha Nani omohi-kemu  
Afuge-yo ya Mi tami mo negi mo  
Ya-so kuni no Yoki hito made mo  
Wo-date nasu Na wo moru Kimi wo  
25Itadakite Afugi-matsuraba  
Umashi Kimi zo Mi tami mo negi mo  
Ya-so kuni no Yoki hito made mo  
Tsuma ko-ra mo Hi-tarashi-bito mo

とつ國人のたふとむかみはものいはぬ人  
かたにして 我頼む天つすめらのみいつは  
めて称へへきをよめるうた  
御榮はこゝたききみの。  
われらみな。いやしきたみ。  
しかはあれと。とつ國人の。  
這伏て。をろかむ鬼の。  
そかくちは。ことをのらす。  
そか目らは。ものもえみへす。  
そか耳は。こゑをえきかす。  
そかてらは。ものにえ觸れす。  
そが足は。つちをえ踏す。  
そか鼻は。かをりえかゝす。  
ことゝはす。おとも聞えぬ。  
しろかねや。こかねもてせし。  
しこ形を。かしこみ頼む。  
やつこらも。醜ひととちそ。  
しかすかに。ありなみをすと。  
恵みはも。めくますきみ。  
御言はも。弥かたききみ。  
ひさかたの。天にみいつを。  
ふりたまふ。天津わきみか。  
大名さえ。のろひ穢せる。  
さか人はなにおもひけむ。  
仰けよや。みたみも称宜も。  
八十國の。よきひとまても。  
小楯なす。汝をもるきみを。  
戴きて。あふぎ奉らは。  
うましきみそ。みたみもねきも。  
やそ國の。善人まても。  
妻子らも。ひたらしひと

Nade-masan̄	Nigihahi-masan̄ wo	撫まさん。にきはひまさんを。
<sup>30</sup> Toho tsu kuni	Yomi no sakahi ni	遠津國。よみのさかひに。
Makari-ite	Toha ni koyaseru	まかり往て。とはに <sup>ゐ</sup> 臥せる。
Hito mina ha	Mi idzu shiranedo	ひとみなは。みいつ知らねと。
Ame tsuchi wo	I-nashi-tamahite	<sup>あめつち</sup> 乾坤を。いなし給ひて。
Hisa-kata no	Ame ni mashi-mashi	ひさかたの。天にましまし。
<sup>35</sup> Ara-kane no	Tsuchi wo hito-gusa ni	あらかねの。地をひとくさに。
Yosashi-masu	Kokota tafutoki	よさします。こゝたたふとき。
Oho-Kimi wo	Yorodzu yo kakete	おほきみを。萬代かけて。
Kefu yori ha	Ware ha hayasana	今日よりは。われは <sup>はや</sup> 榮さな。
Hito mo hayasane!		ひともはやさね

1. 〈ことたき（許多）〉は〈おほき〉の古語。3. 〈とつくにびと〉「異邦の民。4. 〈おに〉「悪霊」、ここで検討すべき言葉〈かみ〉は、正確には悪霊をはじめとして善きにつけ悪きにつけ霊を示している。6.&8. 〈めら〉と〈てら〉は複数形の古語。11. 「口がきけない」「耳が聞こえない」。13. 〈しこがた〉「偶像」。14. 〈ひとどち〉「同じ種類の人間」。15. 〈ありなみおすと〉「真理を拒み続ける」16. 〈めぐます〉は〈めぐむ〉の使役形による敬語的表現。17. 〈みこと〉は〈まこと〉に代わる言葉。19. 〈わがみ〉は〈わがきみ〉の短縮形。22. 〈あふげ〉は〈あおげ〉と発音する。〈ねぎ〉“Priest”（神道の神主の上の位に位置する。Priestsとするのが適当。）23. 〈やそ〉「あらうる」（漢字では〈八十〉）。24. 〈をだてなす〉「盾のごとく」、この〈を〉は〈小〉と書くが虚辞。〈な〉は二人称代名詞の古語。28. 〈ひたらしびと〉「大人の人」。29. 〈にぎはひ〉自動詞。〈を〉は、強いて言えば「～だが」の意。30. 「遠方の国へ、黄泉の国の境に」31. 〈へ〉は〈ゆきて〉の古語。〈とはにこやせる〉「いつまでもそのままにいる」。34. 〈ましまし〉は「おそれおおくもいらっしゃる」の意。複合語の前半は「居る」の本来の意味をとどめおり、後半は敬語で穏やかな表現になっている。35. 〈あからね〉は〈つち〉に掛かる枕詞。〈ひとぐさ〉「人民」。36. 〈よさす〉「容認する」。38,39. 「わたしは主をほめたたへる。そしてあなたも主をほめたたへよ。」。〈な〉は未来を表す古語。〈ね〉は命令法の古語。

この詩篇を韻文訳するにあたって、最初と最後の部分はこれまで以上に自由に翻訳した。

同 [直譯]

エホハヨ我等ニ榮譽ヲ給ハス我等ニ榮譽ヲ給ハス汝ノ恩恵ト汝ノ眞實ノ爲ニ汝ノ名ニ榮譽ヲ  
與ヨ他國人〔上帝ニ仕ヘサル諸國ノ人ヲ云〕ハ何故ニ云ハン今彼等〔上帝ニ仕フル人ヲ云〕ノ  
上帝ハ何國ニ在ル

然シテ我等ノ上帝ハ天ニ在彼レ〔上帝ヲ指〕ノ欲スル所ノ何ニテモ彼レカ夫レヲ行ナフ返テ  
彼等〔上帝ニ仕ヘサル人ヲ云〕ノ神達ハ人作ノ金銀ナリ彼等ハ口ヲ持テモ語ラス彼等ハ目ヲ  
持テモ見ス彼等ハ耳ヲ持テモ聞カス彼等ハ鼻ヲ持テモ嗅ス彼等ノ手ハ彼等カ以テ觸レス彼等ノ  
足ハ彼等カ以テ歩行ス彼等ハ彼等ノ咽喉ヲ以テ語ラス彼等ヲ作り彼等ヲ頼ム所ノ各ノ人ハ彼等  
ノ如成ル

イスラエルヨエホハヲ頼ヨ彼レ〔上帝ヲ指〕彼等〔イスラエル人ヲ云〕ノ便ト楯ナリアロナ  
ノ家族ヨエホハヲ頼ヨ彼レヲ彼等ノ便ト楯ナリエホハヲ畏ル々所ノ人々ヨエホハヲ頼ヨ彼レハ  
彼等ノ便ト楯ナリ

エホハハ我等ヲ心ニ懸キ彼レハ恵マントス彼レハイスラエルノ家族ヲ恵マントシ彼レハアロ  
ナノ家族ヲ恵マントシ彼レハエホハヲ畏ル々所ノ人々長幼共ニ恵マントシエホハハ汝等ト汝  
等ノ子供トニ物ヲ益ントス

天地ノ造物者ナルエホハニテ汝等ヨ恵マル々ヲ我カ願フ天ハエホハノ爲ノ天ナリ而メ彼レ  
カ地ヲ人種ニ賜ヒキ

死者又ハ死境ノ無聲ニ降ル所ノ諸人ハエホハヲ讚美セス返テワレ我等ハ今ヨリ後永久ニエホ  
ハヲ愛称 爲ントス ハレルヤ

DAI HIYAKU NI ZHIFU SAN. (Ps. 123.) 第百二十三

ARABURU HITO NI SEMERARETE AMA TSU SUME あらふる人にせめられて天つ皇のみたすけ  
RA NO MI TASUKE WO NEGI-MATSURU UTA: を ねきまつる哥

Hisa-kata no	Ame ni masu tefu	久堅の。天にますてふ。
Oho-Kimi wo	Wa ha afugana	おほきみを。わは <sup>あふ</sup> 仰かな。
Masura-wo no	Nushi afugu goto	ますら男の。 <sup>ぬし</sup> 主あふくこと。
Wotome-ra no	Tozhi afugu goto	乙女らの。 <sup>とし</sup> 刀自あふくこと。
<sup>5</sup> Me kare sezu	Afugi-tanomite	めかれせず。あふき頼みて。
Mi megumi wo	Tayezu wa ga negu	御恵を。たえす吾ねく。
Hokorahishi	Hito ni warahaye	ほこらひし。人にわらはえ。
Chihayaburu	Hito ni nikumaye	千早振。人にくまえ。
Umashi Kimi no	Megumi shi nakuba	うましきみの。 <sup>めぐみ</sup> 恵しなくは。

<sup>10</sup>Ikaga semu ka mo? いかゝせむかも

1. <てふ> は <ちょう> と発音する。<いふ> の短縮形。「～と言った」という意味だが、ほとんど虚辞としてのみ使用される。2. <あふがな> は、古語、未来形。5. <めかれせず> 「疲れることのない目で」。6. <ねぐ> 「祈る」。<ねぎ> “a priest” を比較参照のこと。複合語の <ねがふ> が一般的用法として今日まで残っている。7. <わらはゑ> は古語、<わらはれ> に相当する受動形。8. <ちはやぶる> 「荒々しい」。後代の歌では悪しき神々への枕詞だったが、結局、神全般に掛かる枕詞になった。<にくまえ> は古語、<にくまれ> に相当する受動形。散文ではここに語幹の形の代わりに、分詞、もしくはいわゆる条件文を必要とする。

同〔直譯〕

天ノ玉床ニ座スル所ノ汝ニ我レハ吾カ目ヲ舉ク觀ヨヤ僕等ノ目ハ彼等ノ主君ノ手ヘ向フ如ク  
婢ノ目ハ彼レノ主母ノ手ヘ向フ如ク其如ク我等ノ目ハ彼レ [上帝ヲ指] カ我等ヲ恵ム迄エホハ  
ヘ向フ  
エホハヨ我等ヲ恵メ我等ヲ恵メヨ如何トナレハ我等ハ十分ニ輕蔑ヲ受ケキ我等ノ魂ハ驕者ノ  
アナド バウカン ケイベツ ジフブン ウ  
悔リト暴君ノ輕蔑ト十分ニ受ケキ

AMA TSU SUMERA NO MI TASUKE WO MEDE-  
KASHIKOMU NO UTA :

あまつすめらのみたすけをめてかしこむの  
うた

Arachi-wo no	Osohi-koshi toki	荒知雄の。おそひこしとき。
Hisakata no	Ama tsu Oho-Kimi no	ひさかたの。天津おほきみの。
Mi idzu mote	Tasuke-masazuba	みいつもて。 たすけまさすは。
Chihayaburu	Hito ni ya nomare	千早振。ひとにや吞れ。
<sup>5</sup> Tagi tsu se no	Kaha ni ya ware ha	瀧津瀬の。川にやわれは。
Shidzumi-hate	Horobi-hateñ wo	しつみはて。ほろひはてんを。
Ame tsuchi wo	I-nashi-tamahishi	天地を。いなし玉ひし
Oho-Kimi no	Aharemi-maseba	おほきみの。あはれみませは。
Shiko tsu wo ga	Ye-mono to narazu	醜つ男か。得ものとならず。
<sup>10</sup> Tonami hari	Torafu hito no te yu	<sup>となみはり</sup> <sup>とら</sup> 鳥網張 捕ふひとの手てゆ。
Tobi-kakeru	Kaho-dori no goto	飛かける。 <sup>かほ</sup> 兎鳥のこと。

Mi yo no tanoshisa !

御世のたのしさ

5. 〈たぎ〉、古語ではこの言葉は〈にごり〉、すなわち濁点があり、「滝」というより川の急流を意味する。6. 〈・・・てんを〉は「～すべきだったのに、しかし」の意。10. 〈となみ〉は〈とりのあみ〉の短縮形。〈とらふ〉は〈捕〉と書くが 〈とりあふ〉から来た言葉。11. 〈かほどり（貌鳥）〉は「美しい鳥」。12. この一行全体が感嘆の意を表している。

#### 同〔直譯〕

イスラエルヲシテ<sup>イ</sup>云ハセシメヨ人々カ我等ニ<sup>ヒトビト</sup>逆テ<sup>ワレラ</sup>發起<sup>サカヒ</sup>セシ時ニ<sup>ハツキ</sup>エホハハ<sup>トキ</sup>吾味方ニ<sup>ワガミカタ</sup>非レハ<sup>アラザ</sup>其時<sup>ソノトキ</sup>  
<sup>カレラ</sup>彼等ノ<sup>イカ</sup>怒リカ我等ヲ<sup>ワレラ</sup>生吞セシナラン<sup>セイドン</sup>其時ニ<sup>ソノトキ</sup>水カ我等ヲ<sup>ミヅ</sup>溺セシナラン<sup>ワレラ</sup>川カ我等ノ<sup>オボラ</sup>魂ヲ<sup>カハ</sup>沈メシナラ<sup>ワレラ</sup>  
<sup>ケウマン</sup>ン驕慢ニ<sup>ミナギ</sup>漲ル水カ我等ノ<sup>ミヅ</sup>魂ヲ<sup>ワレラ</sup>沈メシナラン<sup>タマンヒ</sup>  
<sup>シ</sup>彼等ノ<sup>シ</sup>齒牙ノ<sup>エモノ</sup>得物トテ我等ヲ<sup>ワレラ</sup>捨サリシ所ノ<sup>ステ</sup>エホハハ<sup>トコロ</sup>愛称セラレンヲ<sup>アイシヨウ</sup>吾カ<sup>ワ</sup>願フ我等ノ<sup>ネガ</sup>魂ハ<sup>ワレラ</sup>禽鳥<sup>タマンヒ</sup>  
<sup>ゴト</sup>ノ如ク<sup>ホテウシヤ</sup>捕鳥者ノ<sup>アミ</sup>網ヨリ<sup>ニケ</sup>逃キ<sup>アミ</sup>網ハ<sup>サ</sup>裂ケ而メ我等ハ<sup>サウシテ</sup>逃キ<sup>ワレラ</sup>  
<sup>テンチ</sup>天地ノ<sup>ザウブツシヤ</sup>造物者ナル<sup>ナ</sup>エホハノ<sup>ワレラ</sup>名ハ我等ノ<sup>タヨリ</sup>便ナリ

注：同じ意味の言葉を重複して用いたのは、〈とり〉という言葉だけでは〈鶏〉のイメージを与えてしまうからである。



DAI HIYAKU NI ZHIFU SHICHI. (Ps. 127.)

第二百二十七

YORODZU NO KOTO-GOTO AMA TSU SUMERA NO  
MI TAMA-MONO NARU WO YOMERU UTA :

萬のことこと天つ皇の御たまものなるを  
詠る哥

Ihe ha mo Ama tsu Oho-Kimi no

いへはもあまつおほきみの。

Mi te mote Tatezuba tatazu

御手もて。たてすはたゝす。

Iha-ki ha mo Ama tsu Oho-Kimi no

<sup>いはき</sup>岩城はも。天津大きみの。

Mi idzu mote Morazuba yohashi

みいつもて。もらすは<sup>よは</sup>弱し。

<sup>5</sup>Mi ke shi mo yo Wa ha inuru to mo

<sup>みけ</sup>御食しもよ。我はいぬるとも。

Ama tsu Kimi no Tada ni kudasu zo

あまつきみの。たたにくたすそ。

Shikasuga ni Oho tari mi mi no

しかすかに。大足御身の。

Mi megumi to Omohoyede koso

みめくみと。おもほへてこそ。

Ake-boshi no Ide-konu saki yo

<sup>あけはし</sup>明星の。いてこぬさきよ。

<sup>10</sup>Yufu-dzutsu no Kage kururu made

<sup>ゆうつゝ</sup>夕星の。かけくるるまで。

Adzusa-yumi Itodo isoshimu

<sup>あづさゆみ</sup>梓弓。いとゝいそしむ。

Kahi nakere Umare-ide-kuru

甲斐なけれ。うまれいてくる。

Ko-ra chifu mo Tami wo uruhosu to

こらちふも。たみを潤ほすと。

Ama tsu Kimi no Tamafu takara ya

天津きみの。賜ふ寶や。

<sup>15</sup>Masura-wo ga Yu-de no ya no goto

ますらをか。弓手の矢のこと。

Ya nareba ya Ki no kana-do ni

やなればや。<sup>きかなと</sup>城の金門に。

Wa ga ada ni I-mukafu toki zo

わかあたに。いむかう時そ。

Ito saha ni Yugi ni sono ya wo

いとさはに。ゆきにその<sup>や</sup>箭を。

Takuhafuru Chichi no mikoto ha

たくはふる。<sup>ちち</sup>親父のみことは。

<sup>20</sup>Tanoshikiro ka mo !

たのしきろかも

1.日本人の簡潔さへの嗜好に合わせてかなり文章を圧縮した。〈いはき（岩城）〉は「堅固な城」又は「防塞都市」。7.〈おほたりみみ（大足御身）〉は「偉大なる、すべてを充たす、尊厳な神」の意。9.〈よ〉は〈より〉の古語。11.〈あづさゆみ〉は〈イ〉やその他の語からはじまる言葉に掛かる枕詞。〈いそしむ〉「急ぐ」「努力する」。12.〈こら〉「子どもたち」は古語で複数形。〈ちふ〉は〈ちゅう〉と発音する。古語で〈いふ〉の短縮形。15.〈ゆで〉は〈ゆみで〉「左手」のこと。16.〈やなればや〉「矢であれば」。〈き（城）〉は「しろ」の古語。〈かなど〉は〈金〉と〈門〉という文字からなる、古語、〈かど〉「門」の意。17.〈わが〉「かれらの」。19.〈ちちのみこと〉（一般にはこの前に〈ちちのみの〉という枕詞が掛かる。）「父」という意味。20.〈たのしきろかも〉「何と楽しいことだろう」。〈きろ〉は〈くある〉の意味に該当する。〈かも〉は古典で一般によく使われる〈かな〉と同様、詠嘆の語。

— 53 —

YOKI HITO NO SACHIAHI WO YOMERU UTA :

よきひとのさちはいを詠るうた

Yasumishishi Wago Oho-Kimi ni

<sup>やすみしし</sup> <sup>わごおきみ</sup>  
八隅知之。和期大王に。

Kake-maku mo Tsukahe-matsurite

かけまくも。つかへまつりて。

Hisa-kata no Ama tsu mi nori wo

久堅の。天つみのりを。

Kashikoku mo Mori-keñ hito no

かしこくも。もりけん人の。

<sup>5</sup>Sono sachi ya Kagiri mo shirani

そのさちや。限りもしらぬ。

Ta tsu mono Mi-nori yutakeku

たつもの。みのり<sup>ゆた</sup>けく。

Hata tsu mono Woshi-mono saha ni

はたつもの。食しものさはに。

Waka-kusa no Tsuma no mikoto ha

若草の。妻のみことは。

Niha n'uchi no Tama-katsura goto

庭ぬちの。<sup>たまかつら</sup>玉葛こと。<sup>10</sup>Ari-ginu no Takara no ko-ra ha

ありきぬの。寶の子等は。

Haru-no-be no Waka-na no gotoku

はるのへの。若菜のことく。

Ono ga mi mo Toshi no wo nagaku

おのか身も。年のをなくく。

Ko-ra ga ko no Suwe no suwe made

こらかこの。すゑの末まで。

Kuni sakiku Miyako yutaka ni

國さきく。宮こゆたかに。

<sup>15</sup>Nagaraheñ Ama tsu Oho-Kimi no

なからへん。天つおほきみの。

Mede-tamahi Megumase-tamafu

めて給ひ。めくませたまふ。

Hito no tanoshisa !

人の楽しさ

1. <やすみし> は次に続く言葉に掛かる枕詞。<わご> は<わが> の古語。不規則変化形。5. <かぎりもしらに> 「際限がない」 <に> は否定の古語<ぬ> の原形。6. <たつもの> 「野に栽培された食物」。7. 「畑の作物や食物がたいへん豊かである」の意。8. <わかくさの> は<つま> に掛かる枕詞。<つまのみこと> 「妻」。9. <ぬち> は古語、<のうち> の短縮形。<たま> 「美しい」。ぶどうやオリーブの枝の形を日本語に直すには葛のように形態が似ているものでしか置き換えることはできない。10. <ありぎぬの> は<たから> に掛かる枕詞。後には虚辞として使われることが多くなった。11. <のべ(野邊)> 「草原」。12. <としのを(年緒)> 「一生の糸」。14. <さきく> 「繁栄して」、常に副詞的形でのみ用いられる。17. 「おお！～する人は幸いだ」の意。

同〔直譯〕

エホハヲ畏レ彼レノ道ヲ歩行 所ノ各ノ者ハ幸ナリ汝ハ〔道ヲ歩行信者ヲ云〕勿論汝ノ手製  
ノ物ヲ食ハントス汝ハ幸ナリ而メ汝ハ何事モ樂シクアリ  
汝ノ妻ハ汝ノ家ノ奥ニアル豊ナル葡萄ノ如クアリ汝ノ児トモハ汝ノ机ノメクリナル橄欖ノ小  
枝ノ如クアリ  
觀ヨヤエホハヲ畏ル、所ノ人ハ勿論カク愛セラルセラ山ヨリエホハハ汝ヲ愛テ而メ汝ノ生涯  
ハ汝エルサレンノ繁昌ヲ見 而メ汝ハ汝ノ子供ノ子供ヲ見ンヲ吾カ願フイスラエルニ平安アラ  
ンヲ吾カ願フ

第二十三

あゝ

あゝ。天所知らるる。まじき  
いふ。うゝ。さ。う。は。い。と。慰  
ま。を。撫。ま。ん。と。さ。さ。さ。に。さ。ふ。  
ま。さ。い。ま。さ。の。道。を。や。む。ひ。て。

同

エホハハ吾牧者ナリ我ハ不  
足セシ彼レカ青草ニ於テ  
我ヲレテ卧サシメ彼レカ静  
流ノ傍ニ我ヲ率キ彼レ  
ノ名ノ為ニ彼レカ吾魂ヲ  
改復レ彼レカ我ヲ直キ

岩淵。か。く。さ。さ。る。大。夜。  
ふ。郷。を。け。る。さ。さ。さ。の。や。う。  
い。ま。い。は。ひ。と。さ。さ。さ。の。ま。  
の。ま。い。さ。さ。さ。の。ま。さ。さ。の。ま。  
動。揺。る。ま。さ。さ。の。ま。さ。さ。の。ま。  
ち。や。う。さ。さ。さ。の。ま。さ。さ。の。ま。

司トラス様ニ汝ノ僕ヲ  
驕レル惡ヨリ救ヘヨ然レハ  
我ハ潔ク而ノ大罪ヲ受サラ  
ントス。吾カト吾救主ナル  
エホハヨ。吾ロノ言語ト吾心  
ノ考ヘテシテ常ニ汝ノ目ニ叶ハ  
センメヨ

(九頁目)

第十九  
(八頁目)

TAGAH NI MUTSUMERU MI NO SACHIIHAHI  
WO YOMERU UTA :

たかひにむつめる身のさちはひをよめる  
哥

Uruhashiku Ahi-sumu tami no

うるはしく。相住たみの。

Sono sachi ya Taguhete ihana

そのさちや。たくへて云はな。

Naguhashiki Oho-negi Arona no

なくはしき。おほ禰宜垂偏の。

Itadakite Ya-tsuka no hige yu

戴きて。八束の鬚ゆ。

<sup>5</sup>Koromo made Mo no suso made ni

ころもまで。裳のすそまでに。

Sosogu chifu Kushi-abura ga goto

灑くちふ。奇あふらかこと。

Mata ha shi mo Taguhete ihana

またはしも。たくへていはな。

Hisa-kata no Ama tsu Oho-Kimi no

久堅の。天つわかきみの。

Kashikoku mo Mi koto-nori shite

かしこくも。みことのりして。

<sup>10</sup>Toko-toha ni Mede-tamahi-masu

とことはに。めてたまひます。

Seo-yama no Kushi-yama no he ni

郇山の。くしやまの邊に。

Herumo-ne yu Uruhohi-okeru

へるもね。反留裳嶺ゆ。うるほひ置る。

Tsuyu-shimo no Shira-tama goto mo

露霜の。しら玉ことも。

Uruhashiku Ahi-sumu tami no

うるはしく。あひすむたみの。

<sup>15</sup>Sono sachihahi ha !

そのさちはひは

2. <たぐへて> 「たとえによって」。<いはな> は <いはん> の古語で未来形。3. <なぐはしき (名細)> 「広く知れわたった」、古語、古典的で一般的な歌の <なにしおふ> と同義。4. <やつか (八束)> 「大変長い」。10. <とことはに> 「とこしえに」。11. <くしやま> 「神聖な山」。<へ> <邊>。<つゆしも> 「露」、<しも> は <霜> とかかれるが虚辞。<しも> という副詞と混同すべきではない。14. と15. で頭の三句。旋頭歌の形式ではこれが反復される。

# 同〔直譯〕

観ヨヤ兄弟モ一所ニ住コトハ如何ニ宜敷而メ如何ニ嬉シクアルヨ夫レハアロナノ髭ニ静ニ  
流レ下リ彼レノ衣服ノ裾迄静ニ流レ下ル頂ノ貴キ油ノ如ク又ハセヲ山ニ静ニ流レ下ルヘルモ  
ノ露ノ如シ如何トナレハ其所ニエホハハ恩恵則チ命ヲ永久ニ設ケキ

## 討 議 (Discussion)

アメルマン師は次のような内容の所見を述べた。日本人は口語体の俗な面を除いて使えるようになってきた。このため口語体は宗教的な著作にもふさわしいものになった。アメルマン師は口語体で書かれ、広く流布している宗教に関する出版物をいくつも知っていた。そして、アメルマン師がチェンバーレン氏が提示した方法に対し反対するにいたった最大の理由は二通りの訳が存在するということにあった。聖書を翻訳するに際し、聖書を一つの翻訳の仕方、しかもその方法だけで表現されるべきである、という考えをアメルマン師は根本にもっていたのである。どんなに注釈を加えても翻訳者の教義的見解ははっきりと訳にあらわれてしまうものである。英文祈禱書の詩篇を使用した人の経験によれば、たとえ韻文化され、誇張された表現があっても、この英文祈禱書の詩篇訳は何の注釈も加える必要がないことを示しているかのようだった。また現在、日本語の傾向は漢文体の使用拡大の方向にあり、漢文体と口語体とが次第に接近するという現象が起こっているとアメルマン師には思えたのである。

サトー氏は、チェンバーレン氏の古代日本語による韻文訳を読む楽しみを得たが、それは逐語訳以上に英語の原文の精神を伝えているようにわたしには思えると、ためらわずに言った。しかし、この論文の筆者チェンバーレンが手にいれた成功にもかかわらず、サトー氏はこの文体が旧約聖書全体を訳すには適してはいないというアメルマン師の見解に賛同する方向に傾いていった。儒教の教えに従う者と中国の古典、及び僧侶と漢訳仏典の関係は、ヨーロッパの人と聖書の関係と同様である。同様である以上、その文体は、英訳版聖書がイギリス人の見解としてはレベルが高いと考えられているのと同じように、日本人の判断力からも高い位置を占めなければならない。もし、既に存在する旧約聖書の中国訳が古い中国語である漢文と同様のものであったなら、教養のある日本人には聖書の内容を容易に読みとることができたであろう。そして、もし、中国の古典のように規範的な日本語で聖書が訳され、出版されるなら、日本の一般の人にとって聖書はもっとたやすく理解されるものになるであろう。一般の人達はかなでルビをふった漢字仮名混じりの文章で印刷された、大衆向け新聞というメディアを通して、日々漢文体に親しんできているからである。サトー氏によれば、この問題に関して日本人と意見を交換したところ、同様の意見を表明した人が何人かいたということだった。

フォールズ博士は次のように述べた。口語体は、現在のあまり評判の良くない位置から次第に上向きに向かう様々な要因があること。さらに、日本人は高尚な漢文調の文体をやや滑稽なものともみなしはじめていて、漢学者をある画家になぞらえている。すなわちその画家は高尚な作品で名声を馳せていたが、誰からもかれの作品は理解されなかった。そこで平凡で、判りやすい絵をかき、一般の人の酷評に自らをさらすことになってしまい、画家はみじめな思いにおちいってしまったということである。

ブランシェ氏は、翻訳委員会社中が漢文体で訳出した詩篇 第百篇の写しを一部提出した。  
(次の頁を見よ)

ライト氏がチェンバーレン氏に質問したのは、かれが提唱しているこの方法は、日本人をキリスト教に改宗させるためにかれの詩篇訳を実際に使用するつもりで考えられたものなのかということだった。

チェンバーレン氏はこれらに答えて次のように述べた。目下論じられているこの論文の中で既に詳細に自分の見解を明かにしたので、この会では僅かな時間しかこれ以上さくつものないこと。そして、チェンバーレン氏はアメルマン師にただ一つのことを思い起こしてほしいということを望んで言った。すなわち、アメルマン師は、詩篇を二通りに対比して訳し、その一方の意識を韻文化して出版するということに原則として反対しているが、キリスト教国の中で主要な教会の一つであるイギリス国教会の特に重要な書である英文祈祷書には、同じように二通りの訳がなされているというのである。韻文訳にするということが、二通りの訳の一つとしては条件を満たすものなのかどうかは、議論的にはならなかった。また、チェンバーレン氏はアメルマン師の発言の趣旨に対し、次の点で訂正してほしい旨を依頼した。それは、チェンバーレン氏が漢文体で書かれた宗教的著作をすべて否定したことである。そしてチェンバーレン氏は結論として、漢文体と直訳の文体との差異は根本的な問題ではないという見解を述べた。最後にサトー氏、フォールズ氏の発言に対しチェンバーレン氏は以下のように述べた。サトー氏が多分考えているように、現にある聖書の中国語訳が日本人読者の好む感覚に合うようなものなら、聖書翻訳の偉業は既に達成されたと考え、そのことに喜びを見いだしてもかまわないであろう。しかし、もし達成されたと考えず、聖書を学問的争点に対応しながら訳し、口語体をその手段として用いるならば、その結果を見とどけるまで生きのびられる人は一人としていないということは、充分考えられることである。会話の言葉とは違った言葉で書いている現在の厄介な日本語のシステムを、一つの、共有できる、理解しやすい言葉にかえていくということができれば、そのことを成し遂げた人以上に大きな喜びをいただき、歓呼の声で迎えられ人はいないであろう。しかし、この論文中の訳はある見解をもって翻訳しているのである。すなわち、遠い将来ではなく、今、現在のために、そして、教養のある人々が満足できるような翻訳を意図している。かれらは、あらゆる階層の中で最も重要な位置を占め、リーダーシップを発揮している。現に一般大衆は、かれらが先導する方向に従い、その後をついていっているのである。

詩 百 篇 PSALM 100<sup>10</sup>

- 世界皆エホバに喜び號はり、喜びを以てエホバに事へ、歌を以て其前に来るべし
- 汝等エホバは神なるを知るべし主は我らを造り玉へり
- 我等自ら造りしにあらず主の民主に牧養る羊なり
- 感謝を以て主の門に入り讚美を以て主の殿に昇り主の謝し聖名を讚美 奉るべし
- 主は恩あり主の憐み永遠くその誠世々に盡ざればなり
- 榮光は父と子と聖靈に在ん事を願ふ
- 始にありし今もあり永遠き世にも在如く

アーメン

PSALM 100.

- 詩 百 篇
- 世界皆エホバに喜び號はり、喜びを以てエホバに事へ、歌を以て其前に来るべし
- 汝等エホバは神なるを知るべし主は我らを造り玉へり
- 我等自ら造りしにあらず主の民主に牧養る羊なり
- 感謝を以て主の門に入り讚美を以て主の殿に昇り主の謝し聖名を讚美奉るべし
- 主は恩あり主の憐み永遠くその誠世々に盡ざればなり
- 榮光は父と子と聖靈に在ん事を願ふ
- 始にありし今もあり永遠き世にも在如く
- アーメン

(最終頁)



注

- (1) 『日本の讃美歌』 香柏書房 昭和二二年 九〇—九二頁
- (2) 「チェンバーレンの詩篇試訳—日本讃美歌の誕生(2)」『讃美』第十四卷九号 教文館 昭和十五年九月  
『日本の讃美歌』 香柏書房 昭和二二年 四六一—四七頁 他。
- (3) 現文には副題はないが、*Transaction of Asiatic Society in Japan*, vol. VIII. Pt. 3. の巻末に草仮名交じりで十二篇の詩篇訳が「讃美之歌」(和紙木版)として掲載されており、論文と試訳の双方を明らかにするために、副題を付けた。
- (4) Wette, De, Wilhelm Martin Leberecht, 1780-1849. *Commentar über die Psalmen* は1811年初版。
- (5) Delitzsch, Franz Julius, 1813-1890. ドイツ語版 *Commentar über den Psalter* (2 vols) は1859—60年出版。Francis Bolton訳の英語版は Edinburgh, T. & T. Clark, 1871.
- (6) 原文はローマ字のみだが、*Transaction of Asiatic Society in Japan*, vol. VIII, Pt. 3. の巻末に縦書きで草仮名交じりの試訳があり、これをローマ字と対照できるよう活字にした。ローマ字と違う箇所が多々あるが、そのまま掲載し、注を付けなかった。
- (7) ローマ字で書かれている部分は平仮名用いて〈〉の記号で囲み、漢字で書かれている言葉には( )、訳語には「」の記号で囲んだ。
- (8) この部分はローマ字(ONAZHIKU CHIYOKU-YAKU)であるが、*Transaction of Asiatic Society in Japan*, vol. VIII, Pt. 3. の巻末「讃美之歌」の下段に縦書きで「同直訳」があり、これにローマ字で書かれている文章に従ってルビをふった。改行はローマ字の方に従った。[ ]は原文では割り注である。〈エホバ〉等の下線は実際には縦書きの右側に引かれている。以下の下線も同様。
- (9) [ ]の部分は漢文体の原文では割り注である。以下の[ ]も同様。
- (10) この部分はローマ字だが、*Transaction of Asiatic Society in Japan*, vol. VIII, Pt. 3. の巻末に縦書きで活字になっていたのでルビを含めこれを掲載した。なお、最後の二行はローマ字の方にはない。〈エホバ〉の下線は縦書き右に引かれている。

おわりに

今回、チェンバーレンの「詩篇日本語訳への提言」を翻訳することができたのは、国語学の安部清哉助教授、漢文学の末岡実助教授、林信孝中高英語教諭のご教示のおかげである。また、キリスト教史の五野井隆史東京大学資料編纂所助教授、音楽学の安田寛山口芸術短期大学助教授、日本洋楽史の研究者 中村理平氏にご協力いただいた。各氏に謝辞を申し上げるとともに、讃美歌が様々な分野から研究されることを願う次第である。